再現屋、産声を上げる　Ⅲ

31　朝の電話

オレはじいちゃんにビデオカメラの礼を言った。
「ハッハッハ、撮ったらおまえの得意な編集も頼むぞ。バイト代はちゃんと払うからな」
じいちゃんはご機嫌だ。しきりに膝を叩いて笑う。帰宅直後は険しい表情をしていたゲジゲジ眉毛もすっかりハの字になっている。
「旦那様。明日がございますから、あまり過ごされませんように」
お文がしっかり釘を差す。若い頃からじいちゃんに対して少しも物怖じしない。その性格を買われて身の回りの世話をするようになったのだが、すっかり板に付いている。本当の父娘みたいだ。
反対に多々良さんはマイペースだ。あくまでお抱えという立場に徹し、微笑みながら、机の端っこで黙々と口を動かしている。
「ハッハッハ、今夜は俊郎の土産話に酔わせてもらうかな。どうだ俊郎、東京タワーには行ってみたか？　浅草はどんなだった？」
「そんな、お上りさんじゃないんだから。……そうだ、

じいちゃん、明日ね、オレの知り合いが来ることになってるんだ。じいちゃんのプリンにいたくご執心らしいよ」
「ほお、女性か？」
「よく判ったね」
「もしかして、おまえのフィアンセか？」
じいちゃんが丸い目を大きく見開く。お文も身を乗り出してオレの表情を覗き込む。
「いやだなあ。違うよ。東京で知り合ったんだけど。これから関西で一緒に仕事することになりそうなんだ」
「ほーほー。んで、カノジョか？」
「違うって！」

タタタ、ターターター、タータタター
『七人の侍』がオレを呼ぶ。
携帯の着信音だ。布団の中から手を伸ばし、通話ボタンを押す。
「はいー。菊池です」
『トシぃ？』
「なんだ、志乃か」
『あのな～、あたしな～』
「どうした？」
『お腹こわしてん』

オレは持ち上げかけた頭を枕に落とした。
『もうビチビチでな～』
「そんなん、説明せんでいい!!」
『だってぇ、お母さん、駅弁食べてくれへんかってんも～ん』
「ぜ、全部食べたのか？」
『……ウン』
呆れた。呆れた。言葉がない。
「じゃあ、今日は無理だな」
『ごめんな～』
「しかたないよ。お大事に」
『しくしくしく。プリン～』
「いい加減にしろって」
『ほんでも、トシ、寝起きみたいな声やなぁ』
「だって、この電話で起こされたんだから」
『もうお昼前やで』
携帯の時計表示を見る。十一時二十分。
寝過ごした！　法要は十時からなのだ。

屋敷には誰も残っていなかった。お文も多々良さんも早朝から準備に出ると言っていた。昨晩、酔い潰れて目覚ましを掛け忘れたオレのミスだ。
あわててビデオカメラ一式を収めたバッグを肩に掛け

る。お文の買い物自転車を車庫から出すと、飛び乗って表の坂道を一散に駆け下りた。
法要は駅前の斎場で行われる。オレが到着した時はまだ焼香が続いていた。予定より遅れている。
オレは息を整えて焼香を済ませると、すぐに三脚を立てて撮影の準備に取りかかった。着席の数人が何してるんだろうという目で見ている。

32　息子たち

ばあちゃんの三回忌は、鷲村家なじみのホテルの広間で行われた。撮影には少々暗く、ライトが欲しいところだがそうもいかない。
参列者は子供を含めて五、六十人ぐらいか。
カメラはできるだけ目立たない位置に立てた。窓際に大きな花瓶があったので、その陰からまずは参列者の横顔を撮ることにする。もう一台の旧式カメラで席の背後から無人で定点撮影している。
すでに親族のほとんどが焼香を済ませた。オレは三脚の上でカメラを回転させ、最前列に居並ぶ顔をゆっくり舐(な)めるようにパンしていく。
こんな日に不謹慎だが、最新のビデオカメラを動かせることにオレは気分が高ぶっている。

そもそも、鷲村家で映像の虜（とりこ）になったのは、何もオレが最初ではない。じいちゃんも曾祖父もその時々の撮影機材に手を染めていた。だから家には昔のフィルムが結構残っている。屋敷の裏手の蔵には、明治時代のフィルムだって現存しているという話だ。しかし鷲村家からは映像で身を立てようという人間は過去一人も出ていない。あくまで趣味なのだ。オレがその最初の人間になるつもりだったのだが……。いやまだ希望を捨てたわけじゃない。うん。さあ撮影に集中集中。

折り畳み椅子に大きな体を窮屈そうに押し込んでいる男性は、長男の勘太郎さんだ。五十三歳。卵のような印象を与える体型は、また一回り大きくなったようだ。体を前後に揺らす癖も相変わらずで、目が細いから、常にうたた寝しているように見える。横でしゃんと背筋を伸ばしている細身の奥さんと好対照だ。

その隣、日に焼けた精悍な顔付きで、ばあちゃんの遺影をじっと見つめているのが、三男の勘三郎さん。黒のスーツ姿がこんなに似合わない人も珍しい。若い頃からさまざまなスポーツに手を染め、五十一歳の今も冬はスキー、夏はサーフィンにと出かけていく。ピンと張ったヒゲを剃れば、じいちゃんに一番似ているだろう。

その向こう、さっきまでぺこぺこと頭を下げて、遠来の親族を労（ねぎら）っていたのが、四男の勘四郎さん。五十歳。

肌寒い部屋の中でしきりと汗を拭っている。小柄に見えるが、他の兄弟に劣らず身長はある。猫背のせいで損している。

あと、ここにいない兄弟は、オレのお袋と次男の二人だ。お袋は海外逃亡中だから仕方ないとしても、もう一人はどうしたんだろう。

ひととおり、重要人物の横顔が撮れたので、移動しようと腰を上げたところに、諍(いさか)う声が広間の外から聞こえてきた。

「こんな時間に来おって、親不孝者が」

「外せない打ち合わせがあったのですよ」

ああ、始まった。感情的な言葉を吐いてるじいちゃんとは最もソリの合わない人物の登場だ。オレは再び腰を下ろし、ファインダーを覗き込んで、最後の被写体がフレームインするのを待った。

入口に現れたのは、次男の勘次郎さん、五十二歳。黒々とした髪を丁寧に七三に分け、縁なし眼鏡の奥に光る鋭い切れ目。グレーのスーツに包まれた体から発する印象は、まさに切れ味鋭いナイフ。彼が広間に足を踏み入れた途端、室温が三度ほど下がったような気がする。すたすたと早足で最前列に来ると、他の兄弟たちを一瞥した。

そのまま前に進み、極めて効率的な動きで焼香を済ま

せると、極めて効率的な動きで着席した。
鷲村四兄弟の揃い踏みだ。
どの叔父さんも個性的だから、ワンカットに収めるのはもったいない。あとで一人ずつ念入りに撮ることにしよう。

法要が終わり、参列者は隣室の会食ルームへと移動した。オレはできるだけ各人の打ち解けた素顔を狙おうと、ビデオカメラを手持ちにして、レンズを向ける。しかしまさかあんな情景を撮ることになろうとは。

33　勘三郎の提案

定点カメラのテープを入れ替えて、会食ルームの全景が収まるように設置し直すと、もう一方のカメラを持って、ひとまず自席に腰を下ろした。
学生時代のロケの撮影バイトの経験から、こんな時は、とにかくテープを回しておけ、が合言葉だ。映画と違って、いつ何時シュートチャンスが訪れないとも限らない。幸い今日は準備したテープの量も潤沢だ。オレにとっては久しぶりの撮影だから、今後の活動へのウォーミングアップも兼ねて、思う存分、撮影させてもらおう。
ポンとオレの肩が叩かれた。

「俊郎、本当に帰ってきたんだな」
右隣の席に着くや、持ち上げたビール瓶の口を揺らして、オレに受けろと催促したのは、三男の勘三郎叔父だ。既にネクタイを緩めている。
オレはカメラを録画状態にしたままテーブルの上に置き、コップを持った。
「いやあ、東京は肌に合いませんでしたよ」
「まだ若いから、チャンスはいくらでもあるさ」
注がれたビールがコポコポと旨そうな音を立てる。しかしカメラマンは飲んではいられない。儀礼的に一口だけすする。
反対に叔父はグイッとあおり、ぷはーっと息を吐き出すと、ビデオカメラの方を顎で指し示した。
「それは父さんの依頼かい？」
彼の言う父さんは、つまり勘兵衛じいちゃんだ。
「ええ、今日はバイトカメラマンです」
「つくづく物好きだねえ、ウチの家系は。でもまあ、俊郎が遅刻してくれたんで良かったよ」
「え？　どうしてですか」
「だってオレまた親父とやっちゃったもん。見苦しいビデオがライブラリーに並ばなくてよかったぜ」
昨夜、お文がこっそり耳打ちしてくれた話を思い出す。じいちゃんに対して一番血気盛んに口論を挑むのは、や

はりこの叔父だと。
その叔父は、目の前のビデオカメラのＲＥＣインジケータが点灯していることに気づいていない。レンズもわざと叔父に向けておいた。隠し撮りしているようで気が咎めたが、これもウチの家系の業と思って、堪忍してもらおう。
返杯するべく、ビール瓶を持ちながら訊ねる。
「いったいどんな話をしたんですか？」
「こいつは自分の趣味を仕事に持ち込もうと言いよったんじゃ」
険を含んだ声が突如、飛来した。オレも叔父もぎょっとした顔で振り向くと、じいちゃんが向かいの席から乗り出すように叔父を睨み据えていた。
突然の登場に面食らいながらも、オレは隠し撮りインタビュアーとして適切な質問を繰り出した。
「趣味を仕事にって、どういうこと？」
「そいつに聞いてみるとええ」
じいちゃんは吐き捨てるように言うと、料理の魚にざくざくと箸を突き刺した。
オレは持ったままのビール瓶を叔父のコップに傾けた。叔父はやれやれという顔で、席に深々と座り直すと、コップを見つめながら口を開いた。
「ホノルルにさ、支店を開こうと提案したのさ」

「ホノルルって、ハワイの？」
そこは叔父のレジャーやスポーツの足場だ。休日の大半はハワイで過ごしているという。
「オレだって鷲村製菓の取締役だ。サーフィンに現(うつつ)を抜かしてるばかりじゃないんだぜ。以前から百貨店やショッピングセンターなんかに顔を出して、うちの商品を扱わないかと持ちかけてたんだ。そしたら先日、あるチェーンレストランから色好い返事をもらってさ。デザートのひとつとしてメニューに加えてもいいってな。結構格式の高いレストランなんだぜ」
叔父の顔がだんだん紅潮し、身振り手振りが激しくなってきた。
しかし痛烈な言葉が向かいから飛んできた。
「外人なんかにウチの味が判るもんか」

34　親子

じいちゃんの容赦ない言葉に、勘三郎叔父の頬はますます赤みを増してきた。
「それじゃ聞きますがねぇ。親父が涙を流すほど感動ものの極上プリンを食べさせてくれたのは、どこの誰でしたっけ」
答えはここにいる誰もが知っている。戦後日本にやっ

てきたアメリカ人だ。
じいちゃんは、舌打ちしつつも、負けじと言い返す。
「そやから、わしは長年丹誠を込めて、日本人の口に合うよう、改良に改良を重ねてきたんじゃ。昔といっしょにするな」
五十の息子と七十の父親が、声を荒げて言い合っている。本人同士は必死で論戦を仕掛けているつもりなんだろう。しかし、似たもの同士だけに、掛け合いは妙にリズミカルで、端で聞いてる者には、その切迫感がほとんど伝わってこない。
現に、まわりの親族たちは、二人のやりとりを気にせず食事を進めている。たまに苦笑混じりの視線を送るぐらいである。
いつの間にか、双子らしい男の子達が、愛くるしい顔をテーブルの上に並べて、二人の様子を面白そうに観察していた。
「金髪娘に鼻薬を嗅がされて、フラフラしとるから、その年でも未だに独身なんじゃ。ほんまなら、この子らぐらいの子供がおってもおかしゅうない年齢のくせに」
「親父にとやかく言われる問題じゃない。どうせどんな女性を連れてきたって難癖つけるだろうがよ」
「おまえ以外の兄弟は皆、ちゃんと結婚したぞ」
「全部親父がお膳立てした見合い結婚だろうが」

せせこましい話になってきた。耳を傾けているのが辛い。双子の母親もそう感じたらしく、「こちらへいらっしゃい」と双子の肩に両手を掛けて、向こうに連れていった。あれは確か四男・勘四郎叔父の奥さんだ。晩婚で、二十も年下の美人と結婚した。双子が奥さん似で良かった。

その勘四郎叔父が心配げな表情で、じいちゃんの横にやってきた。よせばいいのに、おろおろしながら口を挟む。

「父さん、もうその辺にしてくださいよ。血圧が上がりますから」

その言葉は火に油を注いだ。じいちゃんは抉るように首を回して、四男の叔父に噛みついた。

「勘四郎！　おまえもおまえじゃ！　他の兄弟のケツ追いかけるばかりでなく、たまには自分で企画書でも書き上げてみたらどうじゃ！」

いきなり、とばっちりを食った叔父は、それでもじいちゃんの気を静めようと躍起になっている。

こう書くと、勘四郎叔父はまるで能なしのように聞こえるかもしれない。しかしこれでどうして勘四郎叔父の調整能力には誰もが一目置いている。他の兄弟が道なき道を乱暴に切り開いていく後から、彼は丁寧に地ならしを行い、気がつくと綺麗な舗装道路が完成している。そ

の能力を認めているからこそ、じいちゃんも彼を取締役の一人として遇している。そうでなかったら、オレのように外に弾き出されていたはずだ。

とはいえ、ビジネスと親子関係は別物だ。

ひとしきり勘四郎叔父に対して小言を並べたあと、返す刀は、勘次郎叔父に飛び火した。

「おい、勘次郎」

「なんでしょう」

次男は少し離れた席で、親子喧嘩など我関せずといった体で食事を続けていた。

「大事な日に遅れるほど、重要な打ち合わせとは何だったんだ？」

まるでロウソクの火が吹き消されるように、会食ルームのざわめきが止んだ。それは、皆が皆、普段から、じいちゃんと勘次郎叔父の間に漂う、尋常ではない緊張感を知っているからだ。

叔父はゆっくりと、ナプキンで口を拭(ぬぐ)った。

35　対立

「ま、ま、ま、お父さん、もう一杯」

勘四郎叔父が声を裏返らせながら、じいちゃんの空コップにビールを注ぎ込んだ。

「そろそろお酒にしますか。おーい、ボーイくん、こちらにお銚子二本頼むよ」
叔父さん、なかなか絶妙な間合いだ。口を開きかけた勘次郎叔父のタイミングを外してしまった。息詰まる緊張にひやひやしていた周囲の親族たちも、一様に胸を撫で下ろしたようだ。
オレはこの隙(すき)にビデオカメラを持って立ち上がり、ビール瓶片手に、テーブルを回る振りをしながら、良い撮影ポジションを狙って移動した。
給仕係の男性も気を利かせて、追加の注文を聞いて回ったりしている。収まっていたざわめきが戻ってきた。
しかし。
「福岡への日帰り出張です。キャナルシティ博多への出店を決めて参りました」
空気を読むことをしない勘次郎叔父の、抑揚のない、冷ややかな声が、和みかけていた雰囲気を再び凍り付かせた。
「なんだと!!　東京や名古屋だけで飽きたらず、この上、まだ手を広げようというのか!!」
じいちゃんはコップをテーブルに叩き付けると、椅子を背後へと蹴り飛ばした。ビールが周囲に飛び散る。
もはや酒席の上の話じゃない。堪忍袋の緒が切れたじいちゃんは、髪のない頭の先っぽまで真っ赤にしながら

立ち上がった。勘四郎叔父がおろおろと後退(あとじさ)りすると、床に尻餅をついた。

オレはとにかくこの期を逃さじと、手前で仁王像のように肩を怒らせるじいちゃん越しに、奥で平然と刺身を口に運ぶ勘次郎叔父に対して、ピントを合わせた。

勘次郎叔父は、決して目線をじいちゃんに向けることなく、異様に通る声で、言葉を続けた。

「全国展開は、既に我が社の総意です。会長の貴方に口出ししていただくことではありません」

じいちゃんは絶句し、右足が踏鞴(たたら)を踏む。

「さらに付け加えるなら、この春に開店した各支店はどこも大変な盛況を呈しています。鷲村の製品を世の中が求めている証拠です。店舗を増やすのは理の当然ですよ」

ファインダーに、勘三郎叔父の顔がひょこっと現れた。

「だからさ、俺も海外進出への先駆けとして、まずはハワイに店を出して……」

「アホ!!　遊び人のおまえの話なぞ論外じゃ」

勘三郎叔父は首をすくめた。もはや、じいちゃんの剣幕は火の玉と化している。誰も手が付けられない。しかしこの気迫こそが〝鷲村〟を一代にして名ブランドにした原動力に他ならない。

逆に、会社を全国的に有名にしたのは勘次郎叔父の

功績だ。関西限定でしかプリンを作っていなかった鷲村製菓が、一挙に洋菓子全般へと業務をシフトし、次々とヒット商品を開発、販売してこられたのは、勘次郎叔父が打ち出した戦略が、ことごとく成功したからだ。

社長の座を退いたじいちゃんが、いまさらどうのこうのと反対意見を述べたところで、耳を傾ける者は、そういないだろう。

ただ、最後の切り札は別として……。

ファインダーを覗いている目とは反対の目の隅で、お文が、夫の多々良さんに何事か耳打ちするのが見えた。すると多々良さんは静かに席を立ち、部屋の隅のパーティションの向こうにある、控え室の方へと消えた。どうしたんだろう。

じいちゃんの声が少し掠(かす)れてきた。

「勘次郎よ、おまえの作った新製品が、本当に旨(うま)いと思うとるのか？　ああ？」

その時、初めて叔父の眉がピクリと動いた。

「ほほう。そこまで言われるのなら、この場の皆さんに御賞味してもらおうじゃありませんか」

36　洋菓子の海

勘次郎叔父は、早口でそう言い放つと、軽く右手を挙

げ、パチンと指を鳴らした。するとその合図を待っていたように、従業員総出じゃないかと疑うほどの数の給仕係が現れた。

食事の皿が瞬(またた)く間に片付けられていく。入れ替わりに、別の給仕係たちが、それぞれキャスター台を押して登場した。

子供や若い女性たちが明るい嬌声を上げた。親たちもそれに倣(なら)って歓声を上げた。なぜなら、彼らの目の前には、次々と、多種多様な洋菓子がズラリ並べられたのである。

最初に目を奪われたのは、六つの大テーブルのそれぞれ長手方向に、三つずつ置かれた巨大なデコレーションケーキだ。それも、苺のベーシック、シフォン、チョコ、チーズ、フルーツなど、子供でなくても目移りする。いずれも店頭販売のサイズじゃない。今日のために用意されたのだろう。

デコレーションケーキを大樹に例えるなら、周囲を飾る花は、ロールケーキやタルト、ミルフィーユなどのレギュラーサイズのケーキ、さらには、シュークリームやエクレール、マドレーヌなどの柔らか系、クッキーなどの乾きもの系、その他、ワッフル、スイートポテト、各種ゼリー、ティラミス。なんと、どら焼きや鯛焼きまである。

極めつけ、最後に登場したのが、プリンだ。
カスタードプリンにバナナソースやリンゴソースを掛けたもの、マンゴープリン、抹茶プリン、黒ごまプリンなどが鈴なりである。
どれもこれも食べる前から、目を楽しませてくれて、ざわめきは容易に収まりそうにない。
「すべてこの春、再編成した商品の数々です。お好きなものからお召し上がりください」
先程まで無表情だった勘次郎叔父。今やまるで一国の王のように勝ち誇った顔をしている。洋菓子界で急成長した企業の顔。業界紙の表紙を飾ったこともある顔。その表情は、満艦飾豊かな洋菓子を家来のように引き連れて、まさに勝ち組ここにありと言わんばかりに破顔している。
しかし、彼が一瞬、じいちゃんの方に向けた眼差しには、一抹の不安が混じっていたことを、オレのビデオカメラは逃さなかった。
じいちゃんは周囲の盛り上がりをよそに、じっと目の前の皿を見つめている。そこには何のソースもかけられていないカスタードプリンが、ぽつねんと皿の中央に鎮座している。およそ一分間はそうしていただろうか。突然ガバッと両手を挙げ、羽織の袖を翻(ひるがえ)すや、素早い動きで、右手に持ったスプーンを抉(えぐ)るようにプリンの腹に突

き立てた。
オレは間髪入れず、右足を軸に体を回転させ、勘次郎叔父の顔にレンズを向けた。叔父は目だけで、じいちゃんの横顔を凝視している。
間違いなく今日のポイントだ。
レンズをじいちゃんに戻す。じいちゃんはプリンの乗ったスプーンを静かに上昇させていく。叔父の自信作であるプリンの粘性を確かめようとしているかのように。
まさに真剣勝負。親子対決。プリン戦争。
オレはカメラがブレないよう注意して、生唾を飲み込んだ。背中を汗が伝っていく。
スプーンの上でぷるるんと震えるプリンが、じいちゃんの目の高さに持ち上げられた。色つやを見ているのか、揺れ具合から密度を推し量っているのか。
やがてスプーンは口許へと近づいた。じいちゃんは背筋をピンと張り、両肘を水平に構えている。その姿は、幼少の頃に見た、プリン職人として脂(あぶら)の乗った頃のじいちゃんを彷彿(ほうふつ)とさせる。
じいちゃんはおもむろに口を開けた。
パクッ。
入った〜!!　さてその評価は如何に？
勘次郎叔父の額に一筋、汗が流れ落ちる。
じいちゃんの顎が、もそもそと動く。

レンズはその表情に迫るべく、ズームインする。

37　品評

じいちゃんの喉がレンズの中で大写しになる。
ごくり。
嚥下音はオレの喉が発したものだ。
オレはじいちゃんとシンクロし始めている。
肉親というより、一俳優として見ている自分。
気楽なホームビデオを撮っているのではない。
これは記録映画だ。
オレは自分がここで何をしているのか、何をすべきか、ようやく胸に収まった気がする。
心をレンズの中に集中させる。
と、じいちゃんの口が僅かに歪んだ。
オレはレンズを急速にズームアウトさせ、バストショットで彼の次の動作を待った。
じいちゃんは含みのある表情を見せながら、上半身を、勘次郎叔父の方へと向けた。
ひとつ深呼吸をしたかと思うと、口が開いて、
「これ、めっちゃウマい～～～」
じいちゃの口がアワアワと動いた。
ん？

声の主は、じいちゃんではない。シンクロするオレでもない。

さきほどの双子の男の子のひとりだった。母親に向かって、プリンの容器を高々と示している。

映像的には、じいちゃんの演技に子供がアフレコしたような形になってしまった。

子供は母親に向かって、もう一つちょうだいと無邪気にねだっている。

じいちゃんは、結局、しゃべるのをあきらめたようだ。頭をつるんと撫でながら苦笑している。

子供に気をとられて見逃したが、一方の勘次郎叔父は……すでに無表情に復していた。

じいちゃん対勘次郎、ひとまず回避か。

勘三郎叔父が、子供に声を掛けている。

「こっちのお芋(いも)のプリンも食べてごらん。美味しいよー」

「ホントだ、おいしー」

「だろう？　これはね、おじさんが特に力を入れて調整した味なんだ。うまいはずだよ」

そんな叔父の思いに頓着することなく、子供は口の周りを芋の色に染めて、食べ続けている。

「このチーズプリンもいいな。最高だね」

周囲の耳を意識しすぎて、独り言が棒読みのようだ。

勘三郎叔父は絶対、役者はなれないな。
我が息子の子供じみた自画自賛にうんざりしたんだろう、じいちゃんの眉間の皺が増え、また浮かない顔になってきた。
親子間の確執を長々と見せられて、いささかオレも疲れ気味だ。少し休憩しよう。
オレはテーブルに戻ると、お薦めの芋プリンに手を伸ばした。
うん、確かに旨い。甘党でないオレでも、二個目が欲しくなる。これはひと通り、洋菓子だけのカットも押さえておいた方が良さそうだ。
次にモカエクレアを賞味してみる。これもまた美味だ。悔しいけれど、叔父たちの手腕を認めないわけにはいかないな。
洋菓子の事実上のターゲットは、子供ではなく、女性である。世の女性たちの甘みに対する嗜好によって商品のメニューや味が大きく左右される。
この場においても、女性たちの盛り上がり方はスゴい。あちらこちらへ手を伸ばしては、休むことなく口に放り込み、互いに品評し合っている。今日が何の集まりなのか、既に彼女らの念頭からは消え去っているに違いない。
オレはコーヒーで一息つくと、バウムクーヘンを一切れ頬張った。うーむ、絶品。

横で勘三郎叔父が、浮かれたように騒いでいる。
「カーッ。俺ってやっぱり菓子作りの天才だね。このブルーベリーパイ、サイコー!!」
するとまた、じいちゃんが雷を落とした。
「勘三郎、いい加減その軽薄な物言いは止めい!! 〝最高〟は一つしかないから最高なんじゃ。おまえには、いったい幾つ最高があるんじゃ!?」

38　特別な趣向

「うへっ、パパ様、どうかご勘弁を〜」
根っからのお調子者、勘三郎叔父のおどけた声に、じいちゃん火山は再び噴火しそうな気配。
「うぬぬぬぬぬ……オイ、勘次郎！」
怒りの溶岩は、三男の前を通り過ぎて、次男へと流れの方向を変えてしまった。
「おまえはワシの顔に泥を塗るつもりか？」
「なんですと」
今度は勘次郎叔父も、じいちゃんを睨(にら)みながら立ち上がった。二人は今日初めて視線を交えたことになる。
喜々としてデザートに舌鼓を打っていた親戚たちは、何が起きたのか理解できず、ポカンとして顔を見合わせている。無理もない。ずっと二人の表情を追っていなけ

れば、オレだって、じいちゃんの今の言葉の真意を理解できなかったろう。

あたりがしんと静まりかえった。

どこか遠くでウグイスの鳴く声がする。

ううーん、この緊張感、誰か助けてくれ。

「お父さん」

その時、森山周一郎ばりの低音ヴォイスがじいちゃんを呼んだ。そうだ、この人がいたんだ。

長男、勘太郎叔父である。

「なんじゃ、勘太」

じいちゃんは昔から長男を勘太と呼ぶ。呼ばれた叔父も、この軽い呼び名を受け入れている。

前にも書いたが、勘太郎叔父は卵のような体型、卵のような顔をしている。兄弟で一番の長身で、なで肩。そのシルエットはまさにトトロだ。肌はすべすべと血色よく、髭(ひげ)は薄い。

オレはこの叔父が感情的になったり、物に動じた場面をかつて見たことがない。その表情は絶えず笑みを浮かべているようでもあり、思索に耽っているようにも取れて、とらえどころがない。

鷲村製菓の現社長。

その彼が、初めて声を発したのだ。

「今日は、特別な趣向を用意しておられると聞いたので

すが？」
いい声だ。しかし特別な趣向とは？
勘太郎叔父の顔が控え室の方を見た。つられて皆も首を回してそちらを見る。
控え室の半開きの扉の陰から、多々良さんの顔が覗いていた。多々良さんはいきなり自分に視線が集中したので、どぎまぎしている。
お文（ふみ）が駆け寄り、多々良さんが手を添えていたキャスター付きのラックを部屋の中に引き入れた。多々良さんもつんのめるように入ってきた。
勘太郎叔父が無言でじいちゃんを促す。
じいちゃんはまたしても爆発するタイミングを逸し、かなり不満な様子だが、訝（いぶか）しむ親族たちを放ってはおけず、一つ空咳（からぜき）すると説明を始めた。
「以前から我が家には、古いフィルムが残っていることは皆さんもご承知の通りじゃ。じつはこのたび、新たな8ミリのフィルムを発見しましての。それを今日はお見せしたい。被写体はもちろん、我が妻、忍（しのぶ）じゃ」
オオという声が、ここかしこで挙がった。
部屋が徐々に暗転した。向かいの天井からスクリーンが降りてくる。
ラックに載せられていたのはビデオプロジェクターだった。多々良さんは部屋の中央に固定すると、壁から

電源を確保した。
スクリーンに真っ白な矩形が映し出された。じいちゃんが頷(うなず)くと、多々良さんがビデオデッキの再生ボタンを押した。
スクリーンに、晩年のばあちゃんが登場した。七十歳を前にしたばあちゃんは、長年の苦労で曲がった腰のまま、とぼとぼと歩いている。その笑顔はオレを追憶の彼方に誘ってくれるようだ。
なるほど、これが特別な趣向か。しかしこれ以上、今日の日にぴったりの趣向があろうか。
「さて次にお見せするのが新発見のフィルムで、昭和四十年の撮影じゃ」

39　若き日の祖母

暗がりの中で、へえだとか、ほおという声が幾つも上がった。
昭和四十年。オレの生まれる九年前だ。
画面にモノクロの映像が映った。変色やブレが若干見られるが、フィルムの保存状態はおおむね良好だ。
画面の中央に見えるのは、鷲村邸の庭にある池だ。カメラがゆっくりと動いて庭の全景を収めようとしている。季節は春だろうか、遠くに見える蔵の屋根の上に、小さ

な雲が一つ。快晴だ。
足音がタタタとして、カメラを挟むように、左右から二人の少年がフレームインした。野球帽をかぶった二人は、池をめぐる石垣を構成する自然石の一つにピョコンと飛び乗ると、こちらを振り返って、大声で呼びかけた。
『早(は)よ来いよー』
勘次郎さんと勘三郎さんだ、と誰かが言った。なるほど面影がある。
『遅いわー、二人とも』
この声は勘次郎叔父の方だ。屈託のない勘三郎叔父に比べて、癇の強そうな顔立ちは、この頃から根付いていたのだな。
続いて現れたのは、ひょこひょこ歩く線の細い少年と、のっしのっしと大きな体を揺らしながら歩く少年。今の勘四郎叔父と、長男勘太郎叔父であることは一目瞭然。誰も指摘すらしない。
四人はこちらを向き、石の上に行儀よく腰掛けた。それを待っていたように、野太い声が、
『それじゃ、母さんを呼びなさい』
これは撮影者の勘兵衛じいちゃんだな。
四人は口々に大声を張り上げた。
『おかーさーん!!』
少年たちの見つめる方向から『はいはい』と言いなが

ら、濃いグレーの和服を着た女性が、画面に入ってきた。
子供たちは中央を開け、ここやここやと指さす。
彼女は勘次郎と勘三郎の間に立ち、正面に向き直った。
カメラが数歩彼女に近寄る。
鷲村忍(しのぶ)、三十歳。後付けしたテロップが入った。
若き日のばあちゃん。周囲から大きな歓声が上がり、拍手が沸き起こった。
だが、オレだけは、皆と違う意味で驚き、息を止めたまま、画面を凝視していた。

なんで、志乃がここで出てくる？

それはまさしく志乃だった。今の今まで忘れていた彼女の突然の登場に、オレは馬鹿みたいに口を開けたまま、スクリーンを見つめていた。
これは何かの冗談か？
オレはかつがれているのか？
しかしその疑問は周囲の声によって否定された。
「やっぱり、お綺麗やったんやねえ」
「結婚する前、十代の頃には何本か映画にも出演したらしいで」
「ちょっと日本人離れした顔立ちやわね。エキゾチックって言うんやろか」

どうやらオレに対する「どっきり」企画ではないらしい。そりゃそうだろうが……。

今にしてみれば思い当たることがある。志乃と出会ったとき、彼女に対して感じた、一種、懐かしさというか、違和感のなさというか。

オレの中のばあちゃんのイメージは、五十代以降だ。心臓に持病があり、体が弱くて、早くから腰が曲がってしまったばあちゃんは、顔立ちさえすっかり変わってしまっていたのだ。

しかし、若い頃の姿が、これほど志乃に酷似していたとは……。

『みんな、お父さんのことは好き？』

忍ばあちゃんが子供らに訊ねている。

『うーん』

『フツー』

いつの時代も、子供らは正直だ。

40　なれそめ

子供たちの返事に対して、カメラマンの不満そうなため息が聞こえ、観客たちの笑いを誘った。

画面の中の忍ばあちゃんは、カメラに両肩をすぼめて見せると、子供に向かって次の質問をした。

『お父さんの作るプリンは？』
すると今度は元気のいい言葉が返ってきた。
『好き好き』
『大好き！』
『食べたい！』
一人、長男だけがモジモジと両手を擦(こす)っている。
忍ばあちゃんは、彼の顔を覗き込んだ。
『勘太郎ちゃんは？』
『……いっぺん、お腹いっぱい食べてみたい』
さらに大きな爆笑が起こった。皆に注目された現在の勘太郎叔父は体を揺らして微笑んでいる。
映像は、池のたもとをそぞろ歩く五人の姿に切り替わった。
楽しそうに談笑している。池の鯉を指さして何事かを母親に伝えようとする子供たち。にこやかに子供たちの頭を撫でる忍ばあちゃん。
この幸せを、このまま保存したい。そんな愛情が画面に溢(あふ)れている。撮影するじいちゃんの姿は見えないが、今のオレとほぼ同い年齢だ。
ばあちゃんはもうこの世にいないが、フィルムのおかげで、オレは若き日のばあちゃんに会うことができた。そしてその姿は、志乃に瓜二つ。オレは因縁めいたものを感じずにはいられなかった。

当たり前だが、忍ばあちゃんの髪は、志乃とは違って金髪ではない。足の運びや、笑ったときの口へ手の持って行き方など、全体に楚々とした振る舞いは、志乃には到底できない芸当だ。唇の左脇に見える黒子（ほくろ）が見分けるポイントってとこか。

……見分ける？

オレは自分で自分の考えを笑った。

そんなオレを見て、勘三郎叔父が顔を寄せてきた。

「笑わんでくれよ、俊郎。オレだって恥ずかしいんだから」

叔父はプチシューを頬張ると、話を続けた。

「俺が物心付いた頃、お袋はまだ二十代だったけど、そりゃもう綺麗だったよ。学校の授業参観になるともう鼻高々でね。よそのクラスから覗きに来る父兄がいたりして、授業どころじゃなかったよ。ははは」

「ばあちゃんが映画出演したって本当ですか？」

「うん、端役だったけどね。十代で銀幕デビューして、いよいよこれからって時に、親父と婚約して引退。もったいない話さ。まあ、体が丈夫じゃなかったから、かえって良かったのかもしれない。とはいえ、産んだ子供が四人。大したもんだ」

「二人はどこで知り合ったんですか？」

「お袋の家はお隣さんだったんだよ」

「それじゃ、幼馴染(おさなじ)み……」
「そう。親父とお袋は小さい頃から一緒によく遊んでいた。遊び場は主(おも)に家(うち)の庭でね。木に登ったり、池の周りを走り回ったり。かと思えば、蔵の中で本を読んだり。一人っ子だった親父にとっては唯一のご近所友達だったらしい。
それが年頃になると、互いに意識し始め、ついには結婚しようと約束するようになった。ところが親父の親父というのが頑固な人で、女優なんぞもってのほかだと大反対。しかたなく、外でこっそりと逢ったり、庭のどこかに秘密の連絡場所を設けて、手紙のやりとりをしたりっていう時代があったんだって。お袋が以前話してくれた」
最後はしみじみとした顔で呟(つぶや)いた。
画面の中では、玄関の松の木の前で、子供たちに囲まれた忍ばあちゃんが、こぼれんばかりの笑みを浮かべていた。
『みんなー、大きくなったら、お父さんのお仕事を手伝ってあげてねー』
『うん』
『いいよー』

41　勘次郎の企て

『兄弟みんな、これからも仲良くね。さあ、お父さんに手を振りましょー』

そう言って、忍ばあちゃんはカメラに向かってひらひらと手を振った。子供らも真似をして手を振る。勘次郎が一人、負けん気の強い気性そのままに、両手をぐるぐる回している。振ってるのだか暴れてるのだか判らない。

こうして映写会は、笑いのオチが付いて、閉幕となった。親族一同、立ち上がって割れんばかりの拍手を送った。

「いやあ、まさか忍さんの美しかった頃をもう一度拝めるとは思わんかったわ」

年輩の男性が目を細めて言えば、

「まさに鷲村家、栄光への第一歩ですわね」

と、お世辞を述べるマダムもいる。

部屋の照明が明るくなり、じいちゃんが手を挙げて拍手に応えた。

「みんな、ありがとう。こんなに喜んでもらえて、天国の忍もさぞかし照れておるじゃろう」

「みんな仲良くだなんて、父さん、自分が言えないことを、母さんに言わせたかったんでしょ？」

勘三郎叔父が戯(おど)けた口調で言った。あちこちで笑いがこぼれる。

以前から、長男と次男の間に確執があることは噂で聞いていた。勘次郎叔父としては、洋菓子業界の新しきトップランナーとして、既に会社の顔ともなった自分が社長でないことに、内心不満を募らせているという。確かに、目立った業績のない長男勘太郎叔父が社長の地位にいることに対して、疑問視する声が無くもないらしい。

「まったくですな」

勘次郎叔父が、襟を正して立ち上がった。

「親子協力し合おうにも、会長のあなたが協力してくださらないでは話になりませんよ」

「なにっ？」

じいちゃんが気色ばむ。しかし勘次郎叔父は、切れ長の目をさらに細めて言い放った。

「なにゆえ〝天使のプディング〟を製造中止したのか、教えてもらえないのですか？」

じいちゃんは顔を真っ赤にしたまま、視線を逸らす。

「〝天使のプディング〟の権利だけは会社に譲らないというあなたのわがまま、我々はずっと、大きな心をもって認めてきました。我が社の隆盛は、〝天使のプディング〟あってのものですからね。

一昔前に比べれば、社が扱う商品も店舗も増え、顧客層は拡がりました。それでもやはり皆、口を揃えて〝天使のプディング〟が食べたいと言う。あなたが自宅の厨

房で細々と日に数十個限定で生産するそのプリンを欲しがっているのです。ところがあなたは理由も詳(つまびら)かにせず、突然、製造を中止すると宣言した」

「中止ではない。お休みじゃ」

「同じことです。……いいですか、ご存じのように〝天使のプディング〟はウチの看板商品です。これを一緒に納めることでまとめた契約もあるのです。このままでは大きな問題が発生します」

スタンドプレーが好きな勘次郎叔父は、さっきと同じように、頭の上で指をパチンと鳴らした。それに呼応して、ふたたび給仕係が現れ、人々の間をまわり始めた。

「私も手を拱(こまね)いて現状を看過していたわけではありません。フランス帰りのパティシエを集め、密かに〝天使のプディング〟に代わる商品開発を進めてきました」

「そんな話、俺は聞いてないぞ！」

今度は勘三郎叔父が机を叩いて立ち上がった。勘次郎叔父は平然と受け流す。

「だからまだ試作だ。とはいえ、ある程度の成果は出せたと思う。食べてみてくれ」

人々は恐る恐る目の前の容器に手を伸ばした。〝聖母のプディング〟と印刷されたシールが、ご丁寧にも貼り付けてある。

42　深まる謎

オレはプラスチックケースの蓋を開けた。隣の勘次郎叔父は、勘三郎叔父に向かって、まだ何か言いたそうだったが、どすんと座って、プリンを引き寄せた。

パカッ、パカッという開封音が重なる。試作品とはいえ、叔父の最新作を食べることができるのだ。拒む人などいない。

じいちゃんも首を振ると、黙って着席した。

そっと勘次郎叔父の顔を盗み見る。顎のあたりを指先でしごいている。口許に漂わせる微笑が憎たらしい。よほど自信があるのだ。

プリン片をスプーンに乗せた。見た目はどこといって普通のものと変わらない、平凡なカスタードプリンだ。オレは口の中へと運んだ。

ん。

んんんん。

これは……ウマい方に一票だ。

上映会の前に出たプリンより数段上であることは断言できる。特に後味が素晴らしい。余韻を残す引き際の良さといったものがある。

顔を上げると、じいちゃんも一口食べたようだ。その顔付きは、なんとも不可解な表情を呈している。果たし

て合格か不合格か。
いの一番に評価を下したのは、やはり勘三郎叔父だった。
「勘次郎兄貴、悔しいが、これはイケるぜ」
すると堰を切ったように、あちこちで「おいしいね」「うまいよ」と賞賛の声が挙がった。
オレはじいちゃんの顔から目が離せなかった。笑ってるようにも泣いてるようにも見える。とてもそこからは、じいちゃんの思いを汲み取ることができない。
〝天使のプディング〟を最後に食べたのは、もう十年前、大学生の頃だ。エラくウマいなーと思った記憶は残っている。しかしこの〝聖母のプディング〟と比べてどちらがウマいかと問われると、何とも返答のしようがない。オレは甘党音痴。
製造中止の経緯について聞いたのは、さっきのが初めてだ。だが具体的な理由、じいちゃん側の事情などは誰も知らないらしい。オレが東京にいる間に何があったのか。
勘次郎叔父は、周囲の反応に気を良くして、ますます眉を釣り上げている。
「どうやら好評のようですね。さらに検討を加えて、次回の役員会にて報告したいと思います」
そして、じいちゃんのそばに寄ると、小声で、

「父さん、あまり意地になって、社の意向に反対しないでくださいね。それこそ母さんの言葉を裏切ることになりますから。……もっとも、母さんを見殺しにするようなあなたですから」
「勘次郎！」
いつの間にその巨躯（きょく）を移動させたのか、勘太郎叔父が勘次郎叔父の肩に手を掛けていた。
「その辺で、やめとけ」
勘次郎叔父は顔をしかめて肩を揺すると、兄の手を払い落とした。
「ふっ。悪い役は全部私に任せっきりですか？　ま、いいでしょう。はははは」
吐き捨てるように言い残すと、叔父はちょっとお手洗いにと離れていった。
勘太郎叔父は、そんな弟に耳を貸さず、がっくり肩を落とすじいちゃんのそばに屈み込んだ。
「父さん、大丈夫ですか？」
「あ、ああ」
それにしても〝見殺しにする〟って穏やかではない言葉だ。ますますわけが判らない。
勘次郎叔父は、会食ルームの扉を開け、外に出て行こうとしていた。
叔父の体が、扉を開けたまま、固まった。

次の瞬間、
「ひゃ、ひゃ、ひゃあああああ」
人前でこんな声を発したのは、叔父の五十年に渡る人生の中でも、初めてだったろう。

43　会場騒然

勘次郎叔父が上げた、悲鳴とも叫びともつかない声は、会食ルームじゅうの人間の耳に届いた。
誰もが話を中断して、入口の方へと目を向けた。
勘次郎叔父は、扉から後ろ向きに数歩退くと、前を見つめたまま、腰が砕けるように床の上へ尻餅をついてしまった。
「兄貴の奴、いい気になって飲み過ぎたから、足でも滑らせたんじゃないか？」
勘三郎叔父は、罰が当たったんだよと呟(つぶや)きつつ、勘次郎叔父のそばに歩み寄った。しかしその彼も兄貴の固まった視線の先にあるものを見て、仰天の声を上げた。
「うわーっ」
勘三郎叔父は飛び上がると、テーブルの角で、したたかに頭を打ち付け、その場に蹲(うずくま)ってしまった。
二兄弟の不可解な連鎖反応に、誰もがどうしたどうしたと立ち上がり、入口の方に集まってきた。

じいちゃんは勘四郎叔父を振り返ると、
「二人とも酒に飲まれよったんや。勘四郎、ホテル専属の医者がおるはずやから、呼んでこい」
勘四郎叔父は、ハ、ハイと頷(うなず)き、閉じた入口の扉を開けて、出て行こうとした。
彼はあわててていたので、扉の前に突っ立っていた人物と危うくぶつかりそうになった。
「あ、すみません、ちょっと……」
そう言いかけて、折からの西日で逆光になった人物を見直した。
「か、か、か、母さん！」
勘四郎叔父は、その場にへなへなと崩れた。
開いた扉に向こうには、腰を曲げた老婆の姿があった。老婆はお辞儀をしながら、一歩二歩と部屋の中に入ってきた。
「あの……プリンは……」
それは、ついさっき、モノクロのフィルムの中で笑顔を振りまいていた、忍ばあちゃんだったのである。
部屋の中はパニック状態に陥った。
逃げようとする者、へらへらと笑う者、気を失う女性たち、両手を合わせて一心になんまんだぶを唱える老人。
阿鼻叫喚と言えば、大げさかも知れないが、おそらく部屋にいる全員が同じ事を考えただろう。

鷲村親子、そして兄弟間の軋轢(あつれき)を見かねた忍ばあちゃんが、幽霊になって出てきたのだと。
今一度この世に現れて、息子たちを叱ろうと。
しかしビデオカメラを構えて、一部始終を撮影していたオレは、既に真相に気づいていた。
老婆は忍ばあちゃんではなく、志乃だった。
似合わない喪服姿に草履を履き、髪の毛を濃い色に染めている。なぜか腹の辺りを押さえ、腰を曲げていたので、老婆に見えたのだ。
この場を収拾できるのはオレしかいない。
オレはカメラを録画状態のまま、小脇に抱えると、大声でわざとらしく笑い始めた。
「はっはっはっは、ほっほっほっほ」
そして両手を叩きながら、ゆっくりと部屋を横切って、台風の中心である入口へと歩いていった。
「いやー、すみませんすみません。その人は幽霊でも亡霊でも魑魅魍魎(ちみもうりょう)でもありません。ご安心ください。彼女は私の仕事仲間なんですよ。無理を言ってオレが呼んだのです。どうかご安心をー」
オレの声に、人々はまだ目を白黒させていたが、ようやく冷静さを取り戻した何人かが、うまく同調してくれた。
「なんやよー、ビックリさせるやないか」

「あんまり似てるんで、息が止まったわ」
オレは努めてにこやかに振る舞いながら、志乃に近づくと、腕を取って顔を寄せた。
「バカ、いまごろ何しに来たんだよ」
「だってアンタに電話しても通じへんし、ホテルに直接掛けたら、今日は新作プリンが出ますよって言うからー」

44　ご対面

今朝、寝坊したオレはあわてて屋敷を出たので、携帯を忘れてきたのだ。責任を感じてしまう。
「それにしても、なんで年寄りみたいな歩き方してんだよ？」
「だって、まだお腹痛いねんもん」
と、腸の辺りを押さえたまま抗弁する。
「それじゃあ、腹の調子が悪いのに、髪結って帯締めて、ここまでがんばって辿り着いたっていうのか。プリンを食べたい一心で」
「ピンポーン。おまけに髪も濃いブラウンに染めてきました。あれやんか？　ＰＫＯ考えてな」
「ＴＰＯだろ？」
「そうそう、たぶんそれ」

オレは深いため息をついた。ここで志乃と問答していても始まらない。オレは彼女の腕を引っ張ると、じいちゃんのところまで志乃の身柄を連行した。

じいちゃんは、目を大きく見開いて、オレと志乃が近づいて来るのを迎えた。

「じいちゃん、改めて紹介します。オレの新しい仕事仲間の」

志乃がぺこりと頭を下げた。

「初めまして、島津志乃です」

「だ、そうです」

じいちゃんは瞬きするのも忘れて、志乃の顔をまじまじと見つめている。

親族一同が騒然とするのも無理はない。本当によく似ている。違いを探せば、志乃の方が少し下ぶくれといった程度だ。灰色がかった顔で、肌つやが悪いのは体調のせいだ。

じいちゃんの目に光るものがあった。じいちゃんは立ち上がると、震える手を差し出し、志乃の手を両手でしっかりと握った。

「今日はよう来てくだすった。これも忍のお導きじゃ。さあ、どうぞこちらへお掛けなさい」

と、隣席の勘四郎叔父を追い払い、志乃を座らせた。じいちゃんはもう志乃しか見ていない。オレは小脇に抱

えたままのビデオカメラを持ち直して、少し離れたところから、じいちゃんの喜悦の表情を撮影することにした。
「おじいちゃんがトシの、俊郎さんのおじいちゃんなんですね。お噂はお聞きしてます」
「はっはっは。頑固なプリン職人などと言うとりましたかな、アヤツは」
志乃はすぐ、お目当てのプリンがテーブルに並んでいるのに気づいたようだ。
「よろしかったらご賞味されますかな。わしの作品ではないが」
「ホンマ!?　めっちゃウレシー!!」
その声は、張りつめた空気を切り裂くように響き渡り、耳をダンボにして二人を注視していた出席者たちの耳を、ビリビリと震わせた。
ばあちゃんがそんな言葉遣いするかよ。心の中で毒ついたが、じいちゃんはそんなこと一向に気にしないかのように、横でにこにこしている。
志乃は〝聖母のプディング〟を手にすると、フタを取るのももどかしく、スプーンの上に盛り盛りとプリンをすくった。目が子供のように輝いている。そのままバクッとスプーンを口に入れた。
ん？　志乃の黒目がわずかに寄った。
そのとき、多々良さんがじいちゃんににじり寄り、何

ごとか耳打ちした。じいちゃんは、
「なんと、もう終(しま)いの時間か」
と呟くと、どっこいしょと席を立った。
志乃の食べる姿に後ろ髪を引かれているのが、ありありと伺(うかが)える。振り返り振り返りしながら、マイクスタンドの方へと歩いていく。
「えー、本日は皆様のお陰で、とてもよい法要になりました。お斎(とき)の方もちょっとした驚きがありましたが、忍も天国で笑っておりましょう」
志乃が口を動かしながらオレに顔を寄せた。
「忍って誰？」
「しっ。後で教えてやるから」

45　意気投合

セレモニーは、滞(とどこお)りっぱなしのまま終了した。
遺影のばあちゃんもさぞかし苦笑してるだろう。
じいちゃんとオレと志乃が、連れだってロビーに降りてくると、目の前に勘次郎叔父が立った。
「父さんも悪趣味ですな。その女性を」と顎の先で志乃を指し示しながら「仕込んでいたのは、いささか悪ノリが過ぎましょう」
だがじいちゃんは否定もせず、からかうような目つき

で息子の鋭い視線を受け止めている。
叔父はゴボンと咳払いすると、
「来週の会議で、今日お話しした方針が正式に通過するでしょう。もしも出席されるのでしたら、脱線するような話は厳に慎んでください」
そう言って踵(きびす)を返そうとしたとき、じいちゃんがさり気なく声をかけた。
「あのプリンは考え直した方がよかろう」
「なんですと？」
叔父は斜交いの姿勢で、父親を睨んだ。
「いや、それがまあ、わしの食べた感想じゃ」
「あたしもそう思う」
いきなり志乃が言葉を挟んだ。叔父は蛇に睨まれた蛙のように一瞬身を引いたが、忌々しげに鼻息を漏らすと、大きな足音を立てて出ていった。
「プリン、あのおっちゃんが作りはったんかー。なんか味に性格がにじみ出てたなー」
「おいおい、滅多なことを言うもんじゃないぞ」
オレがたしなめると、志乃はにんまりと笑って胸を張り、豪語した。
「〝おふくろの味研究会〟会長をナメたらアカンぜよ」
揃ってホテルを出たところで、じいちゃんが志乃に声を掛けた。

「お嬢さん、よかったら家(うち)に寄っていかないか」
「えーっ、いいんですかー」
じいちゃんはすっかり志乃を気に入ったようだ。

春まだ浅い陽の光が、開け放した廊下の向こうから、ガラス越しに畳を照らしている。風にそよぐ松の梢のどこかでウグイスが鳴いている。
まことにのどかな昼下がりである。
広い座敷では、軽く酒を酌み交わしながら、じいちゃんと志乃が話し込んでいる。オレが改めて紹介してから、二人はすっかり意気投合し、じいちゃんは志乃の東京での生活や苦労談に耳を傾けている。志乃を見る目の細いこと。やはり亡き妻の面影を志乃の上に見ているんだろうか。まさか「この女性と再婚する」なんて言い出さないだろうなぁ……。
二人の歓談が続く。オレはすっかり蚊帳(かや)の外だ。
オレは席を外し、台所に行ってみると、勘三郎叔父が一人でビールを飲んでいた。
「よぉ、俊郎、親父はどうしてる？」
「すっかり二人の世界に埋没してますよ」
「だろうなあ。オレだって超オドロキだったよ。思わず心の中で親不孝を謝ったくらいだもんな」
この叔父は、兄弟中で唯一、女ぐせの悪さで幾度とな

く生前のばあちゃんを悩ませた。五十を超えた今でも変わらずお盛んだという噂だ。しかし、オレにとっては最も話しやすい、気さくな存在の叔父なのである。

「なあ、叔父さん」

「ん、なんだ？」

「ばあちゃんが亡くなった原因って何なの？」

オレの質問に、叔父はしばらくコップを見つめていたが、やおら腰を上げると、

「庭に出ようか」

と誘った。

池に掛かる石橋の上で、叔父は前方を指さした。

「この池の向こう側に狭い空き地があるだろ、その先に蔵が見える手前」

「うん」

「お袋は、あそこに倒れていたんだ」